

英語教員養成プログラムにおけるカリキュラムについて 中学高校英語教員に対する質問紙調査を通じて

著者	鈴木 寿一, 相川 真佐夫
雑誌名	研究論叢
号	83
ページ	41-60
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1289/00000004/



英語教員養成プログラムにおけるカリキュラムについて

— 中学高校英語教員に対する質問紙調査を通じて —

鈴木 寿一
相 川 真佐夫

〈Summary〉

Since 2006, a TEFL Program has been implemented in the new curriculum in the Department of British and American Studies at Kyoto University of Foreign Studies. The curriculum includes as many as 13 elective classes related to TEFL, in addition to two mandatory English methodology courses required to obtain a teaching certificate. This curriculum reform was undertaken because it was strongly believed that two courses could not provide enough knowledge and skill training to become an effective English language teacher. The courses included in the TEFL program were designed based on language teaching theory, and it includes various other considerations. One of the considerations is what current English high school teachers expect from a teacher-training curriculum. In order to determine teachers' expectations, a survey was conducted with 255 high school teachers. The results show that teachers have two expectations of teacher training programs: improve prospective teachers' English proficiency, especially, speaking and listening skills, and improve the methods of teaching those skills. There were also some slight differences between what junior and senior high school teachers expect. For example, junior high school teachers feel that there is a greater necessity to follow curriculum guidelines (*Gakushu shido youryo*), and they want to know more about English language education at the primary level to create more overall consistency, and so on. These findings present us with some implications regarding further curriculum reform.

は じ め に

京都外国語大学英米学科では、2006年度よりTEFL (Teaching English as a Foreign Language) コースを導入し、外国語(英語)教員養成を強化するカリキュラムを展開してきた。これには、教育職員免許法施行規則に定める「英語科教育」を主とした教育課程及び指導法に関する科目は「英語教育法1(2単位)」および「英語教育法2(2単位)」のみであり、これだけでは不十分と判断したことが背景にある。「英語教育法1」では、教科教育に関する理論や知識を主として扱い、「英語教育法2」は実践面での技能を扱うものとしておおよその講義目標の線引きを行っている。いずれも90分授業で15週分しかなく、あくまで概説としての位置づけで終始されることは否めない。それ故に、各種教授法、第二言語習得理論等の知識、TEFLおよび教育一般の文献の講読や内容を深化させる議論、指導案の作成方法、模擬授業による実地演習および

省察など、教員になるために必要な基礎知識や技能獲得が不十分と言わざるを得ない状態となっていた。

2006 年度から設置した TEFL コースの科目では、これに 13 科目（1 科目は 90 分を 15 週分）追加し、英語教員養成に必要な知識や基礎的技能の修得を強化することを目的としている。その内容については次節で概観するが、果たしてそれで十分なのか、また、細分化したカリキュラムが必要なものか、様々な角度から評価され、修正される必要がある。再考と改訂を行うことで、より良いものが構築されることになる。

1. TEFL コースのカリキュラム

英米語学科の 2006 年度からのカリキュラム改訂に伴い、TEFL（英語教育）コースが導入され、2009 年度で完成を迎えた。このカリキュラムは、1 年次で基本的な英語力を身につけ、1 年次修了時にコースを選択、2、3 年次では専門科目を履修し、4 年次で卒業論文を作成または卒業研究を実施するという流れを組んだものである。

TEFL コースのカリキュラムは 2、3 年次での専門科目として位置づけられる。そのカリキュラムを構築する際に、以下の 3 つの目標が設定された。

- (1) 中学・高等学校において外国語としての英語を教えるのに必要な技能を養う。
- (2) TEFL（外国語としての英語を教える）の分野または関連領域に関する基本的な知識を身につける。
- (3) 英語を効果的に教えるために必要かつ十分な英語力を養う。

これら 3 つの目標を達成するために、3 つのコア科目群、Language Teaching in Practice, Issues in TEFL, Professional Development for TEFL を設置した。各コア科目は以下の内容を含むものである。

Language Teaching in Practice :

教師としての演習型パフォーマンス・スキルを身につける。模擬授業、演習、研修などの活動を通して英語教育に特化した言語操作能力を修得する。

Issues in TEFL :

講義やディスカッション、文献講読などの活動を通して TEFL「外国語としての英語教授法」の基本的な理論及び関連分野に関する知識を身につける。

Professional Development for TEFL :

授業観察や内省、アクション・リサーチなどの活動を通して専門職としての外国語指導者にとって必要な意識や態度を養う。

これら3つのコア科目をベースに、専門領域に基づいて4科目ずつ設定した。表1はカリキュラムの構成に関わるキーワードである。さらに、表2はそれらの講義目標を示している。各科目の履修時期については、原則的に当該学年次学生が履修できるものとするが、学年次より下の開講学年であれば履修しても差し支えない。例えば、2年次学生は3年次に開講される科目を履修することはできないが、3年次学生は2年次用開講科目を履修することが可能である。

表1 TEFL コースの研究科目：カリキュラム

科目群 \ 学年	2 年春	2 年秋	3 年春	3 年秋
Language Teaching in Practice	I-1 発音指導 音声学 音読	I-2 文法指導法 文法復習 文法演習	II-1 早期英語教育 理論編	II-2 早期英語教育 実践編
Issues in TEFL	I-1 英語教育 教育問題 Reading / Writing (summarizing / opinion writing)	I-2 各種英語教授法 Reading / Writing (summarizing / Opinion writing) Discussion	II-1 第二言語習得 Reading / Writing (summarizing / Opinion writing) Discussion	II-2 評価法 Reading / Writing (summarizing / opinion writing) Discussion
Professional Development for TEFL	I-1 英文法演習 言語分析演習 模擬授業・指導案	I-2 授業観察 指導計画 アクション・リサーチ	II-1 教育問題 Speaking Discussion Debate	II-2 教材作成 教材選定 マルチメディア

(吉田・相川 2011, p. 3)

表2 TEFL コースの研究科目：講義目標

科目群／学年	2 年春	2 年秋	3 年春	3 年秋
Language Teaching in Practice 本科目は模擬授業、演習を通じて英語教員としての言語運用能力及び指導力の向上を図ることをねらいとする。	I-1 適切な音声指導を行うのに必要な音声学の基礎を体系的に学ぶとともに、英語の発音を正しく分析及び産出できる能力を身につけるための発音トレーニングや音読トレーニングなどを行う。	I-2 この授業では、模擬授業や文法教材の作成演習を通じて、日本の中・高等学校におけるコミュニケーションのための文法指導の基本的知識及び指導技術を身につける。	II-1 幼児や児童に英語を指導する上で必要な基礎理論および各指導方法の効果について学ぶ。早期英語教育の効果、意義、問題点や実態、心理発達段階などを踏まえて最も効果的な外国語習得方法についても検討する。	II-2 Language Teaching in Practice II-1 で身につけた理論と実践に関する基礎知識をもとに授業観察や模擬授業を通して、幼児及び児童に適した具体的な指導法を習得する。様々なアクティビティを実際に体験することで具体的な指導法を体得し、授業の計画の仕方や市販の教材や様々な言語材料の利用方法を含めた教材作成方法を身につける。

<p>Issues in TEFL</p> <p>本科目は外国語としての英語教育についての知識とその周辺の問題についての知識を、討論やその分野の文献を読むことを通して、獲得することを目標とする。</p>	<p>I-1 英語教育や教育の諸問題について書かれた英語の記事を読み、基礎知識を獲得する。また、関連領域の基本的な文献を英語で読む力を習得し、英語でその内容を要約したり、それに関する自分の意見・感想を英語で書いたりすることでアカデミック・ライティングの基礎力を養成する。</p>	<p>I-2 受講者は教科書の各章を読んでその要約を書くことを要求される。また、英語教授法についていっそう良く理解し、英語によるコミュニケーション能力を高めるために、外国語としての英語教育の諸問題についての討論も行う。</p>	<p>II-1 受講者は教科書の各章を読んでその要約を書くことを要求される。また、第二言語習得理論や外国語としての英語教育についていっそう良く理解し、英語によるコミュニケーション能力を高めるために、外国語としての英語教育の諸問題についての討論も行う。</p>	<p>II-2 講義、ディスカッション及びテキスト講読を通して、外国語としての英語指導法に関する知識や実践の方策を習得する。この授業では、特に日本における外国語の到達度を評価する基本的原理や手法を学び、授業における指導と評価のあり方及び英語テストの作成方法について学ぶ。</p>
<p>Professional Development for TEFL</p> <p>本科目は、高度な知識や観察やアクション・リサーチを含む専門職としての教職に対する態度を育てることを目標とする。</p>	<p>I-1 効果的な文法指導を行うのに必要とされる文法に関する知識を身につけ、同時に英文法の運用能力を高める。問題演習、言語分析演習、模擬授業等の活動を取り入れる。重要な項目についてはその指導法や指導案を考え模擬授業を行う。</p>	<p>I-2 受講者は経験豊かな教員の授業を録画したものを観察する機会が与えられ、それらの授業に関する討論に活発に参加することが求められる。学生はまた、効果的な授業を計画したり行ったりする方法を学ぶだけでなく、アクション・リサーチの方法も学ぶ。</p>	<p>II-1 受講者は英語によるコミュニケーション能力を伸ばし、外国語としての英語教育への洞察を深めるために、英語教育について書かれたものを読み、自分たちの考えや意見を書いたり、討論したりする。</p>	<p>II-2 英語の授業を行うのに必要な準備として、教科書資料の研究の仕方、到達目標の設定、言語活動の行わせ方について学ぶ。マルチメディア教材を含む、教科書以外の教材の選定または作成方法についても学ぶ。教材作成、プレゼンテーション、模擬授業の活動を取り入れる。</p>

(吉田・相川 2011, p. 4 より一部編集)

2. 外国語（英語）教員養成の科目構成に関わる先行研究調査

神保ほか（2010）は、外国語とりわけ英語教員を養成する教職課程で行われている「英語教育法」の過去3時点（1998年、2002年、2008年）にわたる時系列の実態調査を行い、最近の講義内容の動向を報告している。報告書によると、英語教育法は少人数クラスで行い、授業内容は指導案の作成や模擬授業、そして模擬授業の録画を通して省察し、実用的な指導技術や指導方法などを身につけることを目指したものが行われている、とのことである。同じく、2005年度に教育実習を受け入れた中学、高校の担当教員に対して行ったアンケート調査（神保、2006）によると、教育実習生を受け入れる事前指導として、教員養成機関は指導略案の作成、教具・教材を準備する能力を行うべきであることを必須条件として考えていることを明らかにし、また、英語授業力の養成として「教材研究」、「模擬授業」、「指導案の書き方」を重点的に指導するべき、とも示している。さらに、教科に関する科目として、授業力の養成を優先事項とすべきであり、英語の技能別指導技術を養成する科目を設置すること、とくに、教材論、評価論、マルチメディア教

授法などの科目を実践に基づいた内容とすることを提言している。この背景から、近年の理論知識から実技実践への動向は現場の声による実践技能の必要性を優先順位としたことが影響していると考えられる。

当然のことながら、英語指導力に加え、教師としての英語力の養成、教職に対する態度や心構えなども必要条件として明らかにしており、それらは、資質育成の観点から、「教員志望」、「教職に対する熱意と意欲」、「生徒を理解しようとする姿勢」、「社会的な常識、礼儀、作法」などであり、教職に関する適性の育成から、「教員の職務（担任業務、校務分掌）の理解」、「生徒指導に対する理解」などを求めることも教育実習担当者の声としてあげられている。

調査対象の「英語教育法」は、大学課程の半期分2単位を2科目分とするもので、最近の傾向が実用的な内容に向かい、教職に関する意欲や態度の育成の指導に向かっている一方、限られた授業科目数の枠内では英語教育に関わる理論的な基礎知識が犠牲となっているのではないかと考えられる。このように英語教員に必要な能力や技能について、かなり多くのものを要求されているにも関わらず、大学における教職課程で取り扱うことのできる養成事項は非常に限られている。

そのような実態を克服する方法として、新たに構築されたTEFLコースのカリキュラムは、従来の概説的な「英語教育法1」および「英語教育法2」を深化させる各論的位置づけであり、教員養成大学を含めて他大学には類を見ないカリキュラムとなっている。しかしながら、このようなカリキュラムが本当に教員養成プログラムに求められているものかどうか立ち止まって再考し、カリキュラムの改訂を図らねばならない。そこで、本調査では、中学校英語教員・高校英語教員が、大学における英語教員養成科目としてどのような内容を扱うべきだと考えているかを分析し、本学の英語教員養成カリキュラムの改善充実を図るための参考資料を得ることとする。現職教員の視点から見る「英語教員」の備えるべき要素を明らかにすることで、カリキュラム改訂への新たな示唆を得られることを期待する。

3. 調 査

3.1 目 的

中学校英語教員・高校英語教員が、大学における英語教員養成科目としてどのような内容を扱うべきだと考えているかを調査し、本学の英語教員養成カリキュラムの改善充実を図るための参考資料を得ることである。

3.2 調査方法

質問紙調査

調査用紙（資料1参照）には、調査項目4分野合計63項目について、その内容が英語教員養成カリキュラムで扱う必要があるかどうかを、以下のような5段階リカート尺度を用いて調べた。

5. 絶対必要
4. 抜うことが望ましい
3. 抜っても抜わなくてもどちらでもよい
2. 抜わなくても良い
1. 全く不要

3.3 調査時期と分析対象

2010年7月29日から2011年8月30日にかけて行われた2府4県（京都、大阪、三重、岡山、鳥取、兵庫）で開催された英語教員研修会参加者に依頼して回答してもらった結果、276名から回答を得た。その内、小学校教員、高専、大学教員を除く255名（中学校教員130名・高校教員125名）分の回答を分析対象とした。

3.4 調査項目

全調査項目63項目の内訳は、英語力養成系分野7項目、理論系分野24項目、実践系（教室内教育活動関係）分野16項目、実践系（教室外教育活動関係）分野16項目である。

3.5 調査時の留意事項

調査用紙を配布して回答方法について説明後、調査者が項目名を項目間に10秒程度のポーズを入れながら各項目名を読み上げ、そのポーズの間に回答者は回答した。なお、全63項目中、中学校教員や高校教員になじみのない可能性がある項目（特に理論系の学問分野が項目名になっている項目）については、簡単に説明するようにした。

4. 調査結果と考察

以下、全体、各分野別に、結果を分析し、簡潔に考察を加える。

4.1 全体および分野間の比較

表3に、英語力養成系分野科目・理論系分野科目・実践系（教室内教育活動関係）分野科目・実践系（教室外教育活動関係）分野科目のそれぞれの平均点と標準偏差を示す。

表3 4分野の平均点および標準偏差

分 野	平均点	標準偏差
英語力養成系	4.66	0.04
理論系	3.87	0.08
実践系（教室内教育活動関係）	4.46	0.07
実践系（教室外教育活動関係）	4.06	0.05

255名の全回答者平均値から、英語力養成系分野が最も平均値が高く、次いで教室内と教室外の実践系教育活動関係分野、そして理論系分野が続いている。理論系分野以外の平均値は4.00を超えているが、理論系分野の平均値は4.00を割っており、他の3つ分野よりやや低い。一般に、中高の教員は理論よりも実践に興味関心があると言われているが、今回のこの結果からも、中学校教員も高校教員も、理論系よりも英語力養成系と実践系の項目の必要性が強く感じられていることがわかる。しかし、理論系の平均値も3.80を超えており、決して低い数値とは言えない。

4.2 全63項目の順位

表4は、4分野全63項目を平均値が高いものから順に並べたものである。分野の列のa～dは、それぞれ以下の分野を示している。

- a. 英語力養成系
- b. 理論系
- c. 実践系（教室内教育活動関係）
- d. 実践系（教室外教育活動関係）

表4 4分野全63項目の総合順位

順位	番号	種別	内 容	平均値	標準偏差
1	2	a	スピーキング	4.77	0.56
2	1	a	リスニング	4.75	0.55
3	3	a	リーディング	4.74	0.56
4	42	c	4技能を統合した指導法	4.69	0.54
5	4	a	ライティング	4.68	0.58
6	38	c	リスニング指導法	4.65	0.54
7	33	c	授業展開法（導入から復習まで）	4.64	0.57
8	39	c	スピーキング指導法	4.63	0.53
9	36	c	音読指導法	4.62	0.55
10	5	a	文法	4.62	0.65
11	40	c	リーディング指導法	4.62	0.53
12	41	c	ライティング指導法	4.62	0.52
13	34	c	文法指導法	4.58	0.57
14	7	a	発音	4.55	0.68
15	35	c	語彙指導法	4.55	0.61

16	43	c	コミュニケーション活動のさせ方	4.54	0.65
17	6	a	語彙	4.49	0.71
18	32	c	学習指導案作成	4.48	0.70
19	37	c	発音指導法	4.47	0.61
20	60	d	評価法	4.43	0.65
21	20	b	学習英文法	4.40	0.66
22	56	d	テスト作成法	4.37	0.67
23	16	b	評価論	4.37	0.74
24	12	b	各種英語教授法	4.35	0.73
25	15	b	テストニング論	4.31	0.69
26	44	c	ティーム・ティーチング指導法	4.31	0.74
27	61	d	授業研究法（観察・分析）	4.23	0.70
28	14	b	教材論	4.21	0.73
29	50	d	教材研究法	4.19	0.72
30	47	c	板書の仕方	4.17	0.80
31	11	b	言語習得論	4.16	0.70
32	10	b	学習者論（心理・学習方略など）	4.15	0.78
33	51	d	授業で与える質問作成法	4.14	0.77
34	24	b	英語音声学	4.13	0.78
35	19	b	コミュニケーション論 （異文化間コミュニケーション論）	4.13	0.70
36	55	d	教材作成法	4.10	0.78
37	29	b	国際理解教育（異文化理解教育）	4.09	0.75
38	59	d	テスト結果の解釈法	4.09	0.79
39	49	d	学習指導要領を活かした授業展開	4.09	0.80
40	58	d	テストの改良法	4.02	0.78
41	46	c	視聴覚教具・機器の使い方	3.99	0.87
42	9	b	教師論	3.99	0.84
43	62	d	英語教育実践研究法	3.96	0.80
44	21	b	コーパス言語学（語法研究）	3.95	0.75
45	48	d	学習指導要領解説	3.94	0.77
46	8	b	外国語教育目的論	3.91	0.79
47	57	d	テストの採点法	3.91	0.81
48	53	d	英語語法チェック法	3.91	0.79
49	54	d	教材改編法	3.88	0.76
50	52	d	各種英語辞書活用法	3.86	0.78
51	28	b	小学校英語教育論	3.82	0.90
52	45	c	小学校英語指導法	3.82	0.83
53	17	b	カリキュラム論	3.79	0.83
54	18	b	心理言語学 （ことばの知覚・認識・生成のメカニズム研究）	3.78	0.92
55	63	d	データ分析法（統計処理・解釈）	3.78	0.75
56	30	b	国際英語	3.69	0.76
57	22	b	認知言語学	3.67	0.73
58	13	b	海外の外国語教育	3.56	0.90

59	23	b	生成文法	3.42	0.86
60	25	b	英米文学	3.35	0.85
61	26	b	脳科学	3.28	0.87
62	31	b	英語教育史	3.27	0.97
63	27	b	メディア論	3.14	0.76

英語力養成系 7 項目全てが、実践系の教室内教育活動関係は 16 項目中 13 項目が上位 30 位以内に入っているが、このことは教育現場でこの 2 つの分野が非常に必要とされていることの現れであろう。

一方、同じ実践系でも教室外教育活動関係は 16 項目中 4 項目しか上位 30 位以内に入っていないが、平均値として最低の「データ分析法（統計処理・解釈）」でさえ、平均値は 3.78 で決して低い数値ではなく、必要性はある程度は感じられていると言えよう。

理論系は 24 項目中 5 項目しか上位 30 位以内に入っていないが、そこに入っていない項目中、「生成文法」、「英米文学」、「脳科学」、「英語教育史」、「メディア論」以外は、平均値も 3.50 を超えており、「言語習得論」、「学習者論」、「英語音声学」、「コミュニケーション論」、「国際理解教育（異文化理解教育）」などは 4.00 以上で、必要性はかなり強く感じられている。

4.3 分野別中学校教員と高校教員の意識の差

回答平均値による中学と高校の間の各項目の順位相関により全体的傾向を調べたところ、両者の間には 0.93 ($p=.00$) で非常に高い相関があることがわかったが、ここでは、分野別に各項目の必要度について、中学校教員と高校教員の間で差があるかどうか、また差があるとすればどの項目に差があるかを調べる。なお、以下の分析では、データが正規分布していないため、マン・ホイットニーの U 検定を用いて正確有意確率を算出したが、有意確率は差の大きさを表すものではないため、効果量によって中学校教員の高校教員の回答に差があるかどうかを調べた。

4.3.1 英語力養成系分野

英語力養成系分野の 7 項目の校種別平均値の記述統計、マン・ホイットニーの U 検定結果、正確有意確率、及び効果量を表 5 に示す。なお、表 5～表 8 の「平均値の差」は中学教員の平均値から、高校教員の平均値を引いたものである。

表5 英語力養成系分野における中高教員の回答比較

項目 番号	英語力養成系	校種	平均値	標準 偏差	平均値 の差	<i>U</i>	<i>Z</i>	正確 有意確率 (両側)	効果量 <i>R</i>
1	リスニング	中	4.75	0.63	-0.01	8026.0	-0.39	0.73	- .025
		高	4.76	0.47					なし
2	スピーキング	中	4.77	0.63	-0.01	7927.0	-0.66	0.52	- .042
		高	4.78	0.47					なし
3	リーディング	中	4.66	0.67	-0.16	7216.0	-2.29	0.02	- .14
		高	4.82	0.42					小
4	ライティング	中	4.61	0.69	-0.15	7254.0	-1.63	0.10	- .10
		高	4.76	0.43					小
5	文法	中	4.50	0.75	-0.24	6735.0	-3.03	0.00	- .19
		高	4.74	0.51					小
6	語彙	中	4.43	0.80	-0.12	7711.0	-0.93	0.35	- .06
		高	4.55	0.60					なし
7	発音	中	4.52	0.73	-0.06	7881.5	-0.61	0.54	- .04
		高	4.58	0.63					なし

英語力養成系分野では、すべての項目で平均値が4.00を超えており、中学校教員も高校教員も、その必要性を強く感じているが、「リーディング」、「ライティング」、「文法」の3項目において、中学校教員よりも高校教員の方がより強くその3つの項目の力をつける必要性を感じていることがわかる。この3項目における中高での教材のレベル差が非常に大きいことが影響しているものと思われる。

4.3.2 理論系分野

理論系分野の24項目の校種別平均値の記述統計、マン・ホイットニーのU検定結果、正確有意確率、及び効果量を表6に示す。

表6 理論系分野における中高教員の回答比較

項目 番号	理論系	校種	平均値	標準 偏差	平均値 の差	<i>U</i>	<i>Z</i>	正確 有意確率 (両側)	効果量 <i>r</i>
8	外国語教育目的論	中	3.88	0.82	-0.07	7499.5	-0.59	0.55	- .04
		高	3.95	0.76					なし
9	教師論	中	4.02	0.82	0.05	7575.0	-0.44	0.67	- .03
		高	3.97	0.86					なし
10	学習者論 (心理・学習方略等)	中	4.11	0.79	-0.10	7480.5	-0.84	0.40	- .05
		高	4.21	0.77					なし
11	言語習得論	中	4.09	0.70	-0.14	7167.0	-1.45	0.15	- .09
		高	4.23	0.69					なし

12	各種英語教授法	中	4.32	0.74	-0.07	7717.5	-0.76	0.45	-0.05
		高	4.39	0.72					なし
13	海外の外国語教育	中	3.60	0.94	0.08	7619.5	-0.69	0.49	-0.04
		高	3.52	0.87					なし
14	教材論	中	4.25	0.75	0.08	7173.5	-1.23	0.22	-0.087
		高	4.17	0.70					なし
15	テストニング論	中	4.29	0.71	-0.05	7818.5	-0.34	0.74	-0.022
		高	4.34	0.66					なし
16	評価論	中	4.39	0.78	0.04	7508.5	-1.16	0.25	-0.073
		高	4.35	0.68					なし
17	カリキュラム論	中	3.83	0.85	0.08	7483.5	-0.84	0.41	-0.053
		高	3.75	0.82					なし
18	心理言語学（ことばの知覚・認識・生成のメカニズム研究）	中	3.68	0.94	-0.22	6962.0	-1.88	0.06	-0.12
		高	3.90	0.89					小
19	コミュニケーション論（異文化間コミュニケーション論）	中	4.13	0.75	-0.01	7765.5	-0.21	0.84	-0.01
		高	4.14	0.65					なし
20	学習英文法	中	4.32	0.67	-0.16	7025.0	-1.86	0.06	-0.12
		高	4.48	0.65					小
21	コーパス言語学（語法研究）	中	3.91	0.75	-0.10	7376.5	-1.17	0.24	-0.07
		高	4.01	0.76					なし
22	認知言語学	中	3.64	0.72	-0.07	7390.0	-0.79	0.43	0.50
		高	3.71	0.75					なし
23	生成文法	中	3.16	0.82	-0.11	6607.5	-2.45	0.01	-0.15
		高	3.27	0.88					小
24	英語音声学	中	4.15	0.71	0.03	8025.5	-0.06	0.95	-0.00
		高	4.12	0.85					なし
25	英米文学	中	3.18	0.83	-0.34	6106.5	-3.46	0.00	-0.22
		高	3.52	0.84					小
26	脳科学	中	3.21	0.92	-0.15	7585.5	-0.98	0.33	-0.06
		高	3.36	0.81					なし
27	メディア論	中	3.09	0.79	-0.11	7523.5	-1.01	0.31	-0.06
		高	3.20	0.74					なし
28	小学校英語教育論	中	3.96	0.90	0.28	6497.0	-2.82	0.01	-0.18
		高	3.68	0.88					小
29	国際理解教育（異文化理解教育）	中	4.12	0.83	0.06	7205.0	-1.38	0.17	-0.09
		高	4.06	0.65					なし
30	国際英語	中	3.67	0.78	-0.04	7636.0	-0.56	0.58	-0.04
		高	3.71	0.74					なし
31	英語教育史	中	3.17	0.94	-0.20	7132.0	-1.67	0.09	-0.11
		高	3.37	0.99					小

理論系分野では、24 項目中 6 項目（「心理言語学（ことばの知覚・認識・生成のメカニズム研究）」、「学習英文法」、「生成文法」、「英米文学」、「小学校英語教育論」、「英語教育史」）において、

中学校教員の回答と高校教員の回答の間に差が見られる。

その内、高校教員の方が中学校教員よりも必要性を感じているのは、「心理言語学（ことばの知覚・認識・生成のメカニズム研究）」、「学習英文法」、「生成文法」、「英米文学」、「英語教育史」であるが、「生成文法」、「英語教育史」は、平均値で中高ともに3.30を下回っていて、必要度が余り感じられていない。「英米文学」は中学では3.2を下回っているのに対し、高校では3.5を超えているのは、高校の教材には文学作品が登場することがあるからであろう。

一方、「小学校英語教育論」については高校教員よりも中学教員の方が必要度を感じているのは、中学校教員が小学校での英語活動との接続を意識しているからであろう。

4.3.3 実践系（教室内教育活動関係）

実践系（教室内教育活動関係）分野の16項目の分析結果は表7の通りである。

表7 実践系（教室内教育活動関係）分野における中高教員の回答比較

項目 番号	実践系 (教室内教育 活動関係)	校種	平均値	標準 偏差	平均値 の差	U	Z	正確 有意確率 (両側)	効果量 R
32	学習指導案作成	中 高	4.59 4.38	0.67 0.73	0.21	6770.0	-2.63	0.01	-.175 小
33	授業展開法 (導入から復習まで)	中 高	4.75 4.55	0.49 0.62	0.20	6753.5	-2.88	0.00	-.18 小
34	文法指導法	中 高	4.56 4.60	0.62 0.51	-0.04	8181.0	-0.02	1.000	-.00 なし
35	語彙指導法	中 高	4.53 4.57	0.66 0.56	-0.04	8092.0	-0.07	0.95	-.01 なし
36	音読指導法	中 高	4.63 4.62	0.55 0.55	0.01	8015.0	-0.23	0.83	-.02 なし
37	発音指導法	中 高	4.53 4.42	0.57 0.65	0.11	7524.5	-1.27	0.19	-.08 なし
38	リスニング指導法	中 高	4.64 4.67	0.53 0.55	-0.03	7855.5	-0.56	0.58	-.04 なし
39	スピーキング指導法	中 高	4.65 4.60	0.51 0.55	0.05	7696.0	-0.75	0.46	-.05 なし
40	リーディング指導法	中 高	4.62 4.63	0.53 0.52	-0.01	8092.0	-0.07	0.96	-.01 なし
41	ライティング指導法	中 高	4.62 4.62	0.52 0.52	0.00	8071.5	-0.11	0.94	-.01 なし
42	4技能を統合した 指導法	中 高	4.69 4.70	0.51 0.56	-0.01	7896.0	-0.36	0.74	-.02 なし
43	コミュニケーション 活動のさせ方	中 高	4.63 4.45	0.59 0.68	0.18	6847.0	-2.41	0.02	-.15 小

44	ティーム・ ティーチング指導法	中	4.44	0.63	0.26	6676.5	-2.60	0.02	-.16
		高	4.18	0.81					
45	小学校英語指導法	中	4.05	0.82	0.47	5411.0	-4.63	0.00	-.29
		高	3.58	0.78					
46	視聴覚教具・機器の 使い方	中	4.11	0.88	0.23	6659.0	-2.57	0.01	-.16
		高	3.88	0.84					
47	板書の仕方	中	4.27	0.81	0.20	6762.0	-2.40	0.02	-.15
		高	4.07	0.78					

表7から、実践系（教室内教育活動関係）系分野の16項目中7項目において、中学校教員が効果量小でそれらの項目に対する必要性を高校教員よりも強く感じていることがわかる。それらの7項目は、「学習指導案作成」、「授業展開法」、「コミュニケーション活動のさせ方」、「ティーム・ティーチング指導法」、「小学校英語指導法」、「視聴覚教具・機器の使い方」、「板書の仕方」で、ある。その他の項目については、効果量はなく、中学校教員と高校教員が感じている各項目に対する必要性には差がない。「小学校英語指導法」と「視聴覚教具・機器の使い方」以外のすべての項目でその平均値が4.00を超えていることから、中学校教員も高等学校教員も実践系（教室内教育活動関係）系分野の各項目の必要性を強く感じていると言えよう。

4.3.4 実践系（教室外教育活動関係）

実践系（教室外教育活動関係）分野の16項目の分析結果は表8通りである。

表8 実践系（教室外教育活動関係）分野における中高教員の回答比較

項目 番号	実践系 (教室外教育 活動関係)	校種	平均値	標準 偏差	平均値 の差	<i>U</i>	<i>Z</i>	正確 有意確率 (両側)	効果量 <i>r</i>
48	学習指導要領解説	中	4.13	0.73	0.37	6083.5	-3.76	0.00	-.24
		高	3.76	0.77					
49	学習指導要領を 活かした授業展	中	4.19	0.77	0.22	6955.0	-2.13	0.03	-.13
		高	3.98	0.83					
50	教材研究法	中	4.26	0.70	0.14	7268.5	-1.59	0.11	-.10
		高	4.12	0.74					
51	授業で与える 質問作成法	中	4.10	0.83	-0.10	7712.5	-0.53	0.60	-.03
		高	4.20	0.68					
52	各種英語辞書活用法	中	3.67	0.82	-0.39	6102.0	-3.77	0.00	-.24
		高	4.06	0.69					
53	英語語法チェック法	中	3.79	0.81	-0.25	6639.0	-2.53	0.01	-.16
		高	4.04	0.75					
54	教材改編法	中	3.86	0.80	-0.04	7916.5	-0.16	0.88	-.01
		高	3.90	0.72					

55	教材作成法	中	4.19	0.76	0.17	7078.5	-1.93	0.05	-0.12
		高	4.02	0.79					小
56	テスト作成法	中	4.38	0.71	0.00	7959.5	-0.43	0.67	-0.03
		高	4.38	0.63					なし
57	テストの採点法	中	3.93	0.85	0.03	7784.0	-0.62	0.54	-0.04
		高	3.90	0.77					なし
58	テストの改良法	中	4.05	0.82	0.05	7775.0	-0.75	0.45	-0.05
		高	4.00	0.74					なし
59	テスト結果の解釈法	中	4.08	0.81	-0.03	8034.0	-0.05	0.96	-0.00
		高	4.11	0.77					なし
60	評価法	中	4.48	0.65	0.09	7509.0	-1.29	0.20	-0.08
		高	4.39	0.65					なし
61	授業研究法 (観察・分析)	中	4.20	0.70	-0.07	7784.5	-0.63	0.53	-0.04
		高	4.27	0.69					なし
62	英語教育実践研究法	中	3.92	0.80	-0.09	7688.0	-0.79	0.43	-0.05
		高	4.01	0.79					なし
63	データ分析法 (統計処理・解釈)	中	3.79	0.79	0.03	7834.5	-0.54	0.59	-0.03
		高	3.76	0.72					なし

表8が示すように、実践系（教室外教育活動関係）16項目中6項目において、中学校教員の回答と高校教員の回答の間に差が見られる。差が見られた6項目の内、「学習指導要領解説」、「学習指導要領を活かした授業展開」、「教材研究法」、「教材作成法」の4項目は中学校教員のほうが高校教員より必要性を感じている。教科書の英文のレベルと入試問題の英文のレベルのギャップが大きい高校と違って、中学では学習指導要領に準拠して授業を行いやすいという事情があるため、学習指導要領を読む教員が高校教員に比べて多いのであろう。また、「学習指導要領を活かした授業展開」や「教材研究法」や「教材作成法」の必要性を感じる中学教員が多いのは、高校では英語だけでも何種類もの科目があり、それぞれの科目に教科書があり、その分量も多く、教科書に含まれている教材も豊富だが、中学校では教科書が1冊で、そこに含まれている教材の量も少なく、学習指導要領を具現化した授業をするには、これら3つが高校教員に比べて必要と感じる中学教員が多いのであろう。

一方、高校教員の方が中学校教員よりも必要性を感じているものは「各種英語辞書活用法」、「英語語法チェック法」の2つである。これは、扱う教材も中学校に比べて多種多様になり、教師も生徒も中学に比べて辞書を引くことが不可欠になってくるからであろう。また、高校では生徒が書いた英文の添削作業が教員に求められることが中学に比べて多いため、その必要性が感じられるのであろう。

5. 自由記述回答

自由記述欄に書かれていたことは以下の通りである。コメント末の数字は、回答者によって書

かれた必要度を示す。

- ① 「発達心理学及び認知心理学」と「言語習得及び英語教授法お及び授業展開法」との関連をおさえておく必要があると思っています。(5)
- ② 現場では「授業の向上」が大目標になり、さまざまな研修会がありますが、「テスト作成の向上」も大いに必要だと思います。日本語訳に頼らない読解力を測定するための問題とはどのようなものか、などの指導や研修が必要だと感じています。(5)
- ③ e-learning の活用法。NHK の英語教育プログラムはここ数年 Web 上だけでなくケイタイサイトと連動しているようです。学生の日常生活の一部となっている「ケイタイ」を有効に利用するためにぜひ授業でとりあつかってみてください。(4)
- ④ 現場にいと、英語はどうしても、何をしても苦手という生徒と必ず出会います。LD や ADHD (それらの生徒が必ずしも LD や ADHD ではないのですが、英語学習の場面ではその傾向が強く現れます。)についての知識があるおかげで何とか対処しています。英語や教授法などの知識に加え、英語を苦手とする人(生徒)はどういうところでつまずくのか、問題を抱えているのかについて学べる科目があればと思います。(5)
- ⑤ 各種検定(英検等)等取得のための指導法・特別支援学級等での指導法授業展開法(実践的なもの、具体的で事例等を挙げてあるとうれしいです。)(新卒1年目で担当になった同じ職場の人が悩んでおられたので)(4)
- ⑥ 各中学・高校等で行われている指導力のある先生の授業への参加(5)
- ⑦ EFL 環境における英語教育について(5)(ESL 環境での英語教育(法・論)は日本人にとっては役に立たないことが多い)

以上の①から⑦についても、今後、扱っていくべきであろう。

次の⑧と⑨は TEFL の分野ではなく、他の教職科目で取り扱われるべき項目であろう。その上で、英語授業との関連で扱っていくことが考えられる。

- ⑧ 英語に限らずですが、本気で教師をめざすのであれば、生徒指導論、英語科としていうと、英語授業のマネジメント力の一部として、生徒指導が必要だと思います。(5)
- ⑨ 特別支援を要する生徒についての概論、配慮の仕方など。(5)

最後に、

- ⑩ 理論ばかりで頭でっかちの人が実習に来られることがあります。また、生徒との関わり方が分からず、困ってしまわれる方も最近多いです。英語に対する知識もとても大切ですが、人として魅力のある人、話術、人としてしっかりコミュニケーションができる人をまず土

台としてつくれるカリキュラムが必要だと思います。

というコメントについては、教職科目だけでなく、授業や行事など、大学の教育活動全体を通して取り組んでいくべきことであろう。

6. ま と め

今回の調査によって、明らかにされたことのひとつは、現職の教員は英語力とくにスピーキングやリスニングという音声面での養成を強く求めている点である。また、それらの指導法についてもかなり上位に位置づけられている。音声面での英語運用力とその指導技能の向上を図らねばならないことは、英語教員養成カリキュラムと現職教員の期待値にあったものとして、改訂への大きなヒントとなるであろう。また、中学教員と高校教員によっても求める項目に差異があることも判明した。このことは、中学校教員免許と高等学校教員免許をひとつくりにカリキュラムを扱っている現状に問題を提起しているように思われる。

今回は、中学校教員と高校教員にアンケート調査を行って各項目の中高に勤務する現職教員が必要と感じているのはどんなことかを調べた。回答者数が255名とこの種の調査としては少ないが、今回の回答者は全員、自ら進んで研修会（どの研修会も強制ではなく、すべて自由参加による研修会）に参加した人たちである。それゆえ、一般の教員より、研修に熱心で意識が高い人たちであり、実際に教員として仕事をする上で多くのことが必要であることを自覚している人たちであるので、調査の質は高いと考えられる。項目によってその必要性にはかなり差はあるが、全項目で平均値が3.0を超えていたことは、回答者の教員としての見識の高さを物語っていると思われる。

なお、今回の調査項目の内、理論系の項目の一つである「心理言語学（ことばの知覚・認識・生成のメカニズム研究）」については、もっと実際の授業と結びつけて紹介すれば、現実には実際の授業改善に非常に役立つ情報を提供できる分野である。

また、「データ分析法（統計処理・解釈）」は、「実践系・教室外教育活動関係科目」16項目中では一番低く、3.7台の平均値である。しかし、教育界でも数値目標の達成が求められるようになり、高校では全国模試における学校の平均偏差値のアップダウンに一喜一憂しているなど、好ましくない状況が生じている学校が多くなっている。数値データの解釈方法、統計処理方法などを扱う内容は、教員養成カリキュラムの必須項目になると考えられる。

今回の調査結果に基づいて、教員養成カリキュラムを構成すれば、さらに充実した英語教員養成プログラムにすることができるであろう。

参考文献

- 神保尚武・広野威志ほか『英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究』（平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 2006.）
- 神保尚武・久村研・酒井志延ほか『英語教員の質的水準の向上を目指した養成・研修・評価・免許制度に関する統合的研究』（平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 2009.）
- 神保尚武・久村研・酒井志延ほか『英語教員の質的水準の向上を目指した養成・研修・評価・免許制度に関する統合的研究』（平成21年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 2010.）
- 吉田真美・相川真佐夫「第1章 TEFL コースの概要」（相川真佐夫，齋藤榮二，久保哲男，鈴木寿一，杉本義美，戸津井ペニー，吉田真美，谷村緑『専門職としての英語教員を目指した教員養成カリキュラムに関する総合的研究』2010年度学内共同研究助成報告書（第1報）京都外国語大学・京都外国語短期大学 2011.）

資料 1

大学での英語教員養成科目内容についてのアンケート調査にご協力下さい。

京都外国語大学英米語学科では、2006年度より新カリキュラムをスタートさせました。新カリキュラムでは、2年生より国際研究、比較文化研究、言語研究、英語教育研究の4コースのいずれかを学生ひとりひとりの興味関心によって選択履修できるようにしました。英語教員免許を取得するための必修科目である「英語教育法」2科目以外に、英語教育研究コースでは全部で18科目を開講して、学部レベルでの英語教員養成に取り組んでおります。

本日は、教育現場で実際に英語を教えておられる先生方ご自身の教員としてのご経験に基づき、「教員志望の学生に大学でどのような内容を学んでおいてほしいか」、「こんな内容は教員志望の学生には不要だ」、あるいは、ご自身の学生時代を振り返って、「こんな内容を大学で学んでおきたかった」、「こんな内容は不要だと思う」といった観点から、ご意見をいただければ幸いに存じます。

先生方のご意見を参考にさせていただきます、今後の京都外国語大学英米語学科英語教育研究コースの授業内容の改善・充実を図ってまいりたいと存じます。どうぞよろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

2011年8月1日 京都外国語大学英米語学科英語教育学担当教員一同

本調査にご回答いただいた内容につきましては、授業内容改善以外の目的には使用いたしません。

回答方法：各項目の必要度の5つの欄のいずれかの番号を○でお囲み下さい。

	内 容		必	要	度	
①	英語力養成系	絶対必要	あることが望ましい	どちらともいえない	なくてもよい	全く不要
1	リスニング	5	4	3	2	1
2	スピーキング	5	4	3	2	1
3	リーディング	5	4	3	2	1
4	ライティング	5	4	3	2	1
5	文法	5	4	3	2	1
6	語彙	5	4	3	2	1
7	発音	5	4	3	2	1
②	理論系	絶対必要	あることが望ましい	どちらともいえない	なくてもよい	全く不要
8	外国語教育目的論	5	4	3	2	1
9	教師論	5	4	3	2	1
10	学習者論 (心理・学習方略など)	5	4	3	2	1
11	言語習得論	5	4	3	2	1
12	各種英語教授法	5	4	3	2	1
13	海外の外国語教育	5	4	3	2	1
14	教材論	5	4	3	2	1
15	テストング論	5	4	3	2	1
16	評価論	5	4	3	2	1
17	カリキュラム論	5	4	3	2	1
18	心理言語学 (ことばの知覚・認識・生成のメカニズム)	5	4	3	2	1
19	コミュニケーション論 (異文化間コミュニケーション論)	5	4	3	2	1
20	学習英文法	5	4	3	2	1
21	コーパス言語学(語法)	5	4	3	2	1
22	認知言語学	5	4	3	2	1
23	生成文法	5	4	3	2	1
24	英語音声学	5	4	3	2	1
25	英米文学	5	4	3	2	1
26	脳科学	5	4	3	2	1
27	メディア論	5	4	3	2	1
28	小学校英語教育論	5	4	3	2	1
29	国際理解教育(異文化理解教育)	5	4	3	2	1
30	国際英語	5	4	3	2	1
31	英語教育史	5	4	3	2	1

③	実践系(教室内教育活動関係)	絶対必要	あることが望ましい	どちらともいえない	なくてもよい	全く不要
32	学習指導案作成	5	4	3	2	1
33	授業展開法(導入から復習まで)	5	4	3	2	1
34	文法指導法	5	4	3	2	1
35	語彙指導法	5	4	3	2	1
36	音読指導法	5	4	3	2	1
37	発音指導法	5	4	3	2	1
38	リスニング指導法	5	4	3	2	1
39	スピーキング指導法	5	4	3	2	1
40	リーディング指導法	5	4	3	2	1
41	ライティング指導法	5	4	3	2	1
42	4技能を統合した指導法	5	4	3	2	1
43	コミュニケーション活動のさせ方	5	4	3	2	1
44	ティーム・ティーチング指導法	5	4	3	2	1
45	小学校英語指導法	5	4	3	2	1
46	視聴覚教具・機器の使い方	5	4	3	2	1
47	板書の仕方	5	4	3	2	1
④	実践系(教室外教育活動関係)	絶対必要	あることが望ましい	どちらともいえない	なくてもよい	全く不要
48	学習指導要領解説	5	4	3	2	1
49	学習指導要領を活かした授業展開	5	4	3	2	1
50	教材研究法	5	4	3	2	1
51	授業で与える質問作成法	5	4	3	2	1
52	各種英語辞書活用法	5	4	3	2	1
53	英語語法チェック法	5	4	3	2	1
54	教材改編法	5	4	3	2	1
55	教材作成法	5	4	3	2	1
56	テスト作成法	5	4	3	2	1
57	テストの採点法	5	4	3	2	1
58	テストの改良法	5	4	3	2	1
59	テスト結果の解釈法	5	4	3	2	1
60	評価法	5	4	3	2	1
61	授業研究法(観察・分析)	5	4	3	2	1
62	英語教育実践研究法	5	4	3	2	1
63	データ分析法(統計処理・解釈)	5	4	3	2	1
64	その他に、学部での英語教員養成コースの授業で扱う必要があるとお考えのことをございましたら お書きください。箇条書きでも文章記述でも結構です。最後に、必要度(5または4)をお書き下さい。					

次の①と④については、該当するものを○でお囲み下さい。

①勤務先校種(非常勤先を含む)：(小 中 高 大 その他)

②教職経験年数：()年(非常勤講師期間を含みます。端数は切り上げてください。)

③調査結果送付を
(希望する 希望しない)

④メール・アドレスをご記入くださった方には、今後、研究会やセミナーの案内をお送りいたします。
一斉配信による研究会やセミナーの案内を

(希望する 希望しない)
希望される方は上の()内にアドレスをお書きください。

